

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集
里山の魅力

70

2010 November

特集 里山の魅力

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていくな媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

70

2010 November

contents

- 3 視点 里山の魅力と保全の課題 国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長 あん・まくどなるど
- 4 里山と新たな「関係価値」の構築 総合地球環境学研究所教授 阿部健一
- 6 森林の町で守り続けられる「日本のいなか」 《鳥取県智頭町新田》
- 8 離島自立の「遺産」が形成する里山の光景 《島根県西ノ島町》
- 10 訪れる人の心を癒す「ふるさと村」 《岡山県津山市阿波地区》
- 12 人の営みで維持されてきた湿原 《広島県北広島町》
- 14 住民が守る美しい里山風景 《山口県下松市米川地区》
- 15 「若者たちの地域づくり」 学生たちの活躍が地域の人気を集める「そうぐらさん小学校」 《岡山県総社市》
- 16 「地域に生きる企業家群像」 株式会社村上農園 社長 村上清貴 《広島市》
- 20 「企業連携レポート」 品質重視の企業マインドを共有し、純国産の高性能救命艇を開発 《山口県下関市》
- 22 「キラリ、輝く元気企業」 伝統的な茶文化を世界に発信し、新たなビジネス展開を図る中村茶舗 《島根県松江市》
- 24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」 「町を創るのは人の思いで、人が集まる拠点づくりに取り組む杉田真理子さん」 《鳥取県米子市》
- 27 「ご当地B級グルメ」 府中焼き 《広島県府中市》
- 28 「藩ものがたり」 鳥取藩 《鳥取市》
- 30 「庭園逍遥」 正善院庭園 《鳥取県三朝町》
- 32 「国宝の旅」 瑠璃光寺五重塔 《山口市》

表紙写真：鳥取県智頭町新田の棚田（写真提供：智頭町）
 目次写真提供：岡本良治（島根県松江市在住）、古川誠（島根県斐川町在住）、津山市阿波支所
 表紙デザイン：久原大樹（広島市在住）

*本誌は再生紙を使用しています。



特集 里山の魅力

視点 里山の魅力と保全の課題

国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長
あん・まくどなるど

一九九八（平成十）年から三年間、私は農山漁村の暮らしを研究するため、キャンピングカーに改造した軽自動車です。北海道から沖縄まで日本の沿岸のほぼ

八割方をフィールドワークした。そこで強く感じたことは、日本は実に多様性に満ちていることだ。同じ三月でありながら、北海道では防寒服に身を包んで吹雪の中を走り、沖縄では半袖のシャツでも汗ばむほどだった。こうした気候の多様性だけでなく、里山・里海の姿も多様である。確かに、一定の普遍性はあるが、地域ごとに多様性に富んでいる。それは、日本の里山の大きな魅力でもある。

と同時に、里山が人々の生産・生活の場であることも日本の里山の特徴である。決して美しいだけの自然ではなく、その光景から人の息遣いが伝わってくる。それが日本の里山だ。

この数年、日本では里山が注目され、保全に向けた活動も活発化している。その背景には、進展するモノカルチャー化に対する違和感や危機感から、かつての農法や森林管理を見直し、それを未来に生かそうという考えがある。

つまり、多くの人々は多様性のある社会の必要性を強く感じており、そのため多様性に満ちた里山の魅力が高まっているのだ。最近、若者たちが里山で暮らしたいと考え、実際に移住しているのも、自分なりの人生を送りたいという思いにほかならない。

しかし、魅力的な里山であっても、それを保全するためには多くの課題がある。まず一つは新しい仕組みづくりが必要である。人々のボランティア精

神だけに依存するのではなく、経済的に成り立ち維持できるようにならなくてはいけない。そのためには、企業が休耕田や森林を使ってビジネスを展開できるようにすることも一案であるし、「里山里海保全税」といった新しい税制度も検討すべきだろう。

また、積極的に外国人を受け入れることも大切だ。政府は世界各地の「SATOYAMA（里山）」をつなぐ国際ネットワークを立ち上げようとしているが、まさにグローバルな視点で保全に取り組むことが必要であろう。

そして、最も重要なことは、里山が持つ五十年、百年という長期的な時間軸を見直すとともに、里山から里海までをつなぐ総合的かつ循環的な視点を持つことである。そうすることで、日本の里山・里海はより魅力を高められるし、多様性に満ちた循環型社会を実現できる。



profile
あん・まくどなるど
 プリティッシュ・コロンビア大学東洋学部卒業。現在、全国環境保全型農業推進会議委員（農林水産省）、農林水産省生物多様性戦略検討会委員、(財)地球・人間環境フォーラム客員研究員なども務めている。主な著書に、『環境歴史学入門』『気候変動列島ウォッチ』などがあり、『カナダの元祖・森人たち』は2004年カナダ首相出版賞を受賞した。

里山と新たな「関係価値」の構築

阿部健一

里山が見直されているのは、自然との「つながり」を取り戻そうとするからにほかならない。その里山を再興するためには、都市と農村の対立を越えた新しい「関係価値」を構築することが必要だ。

「関係価値」の喪失と里山の見直し

里山が見直されている。

学生たちと一緒に中国山地の里山を訪れると、ほとんどの学生たちは目の前に広がる里山の光景に見入る。風光明媚な景観が広がっているだけでなく、珍しい建物などがあるわけでもない。稲刈りが終わった田んぼが広がり、広葉樹林のふもとに家屋が点在するだけの風景だ。時間はゆっくり流れている。

半日前までは都市の利便性をたっぷり享受していた若者たちが、どうして里山の光景に見入るのだろうか。そのことを考えると、「一つのキーワードとして浮かび上がるのが「関係価値」である。「関係価値」を持ち出したのは、多くの人たちが現在の生活の在り方に疑問

ゆっくりと時間が流れる里山



生産と生活が不可分だった里山

「つづいた「関係価値」の一つが里山である。里山は、人が手を加えることで維持され、豊かになってきた土地空間である。ここでは生産と生活が不可分の関係にあった。

しかし、高度経済成長期以降、生産が交換価値に特化するとともに、里山



自然に抱かれながら営まれてきた生産活動

からの人口流出が続いた。その結果、里山での生産と生活の「つながり」はほとんど切断され、里山を支えてきた農村コミュニティも喪失されようとしている。貴重な「関係価値」である里山を再興するためには、里山の基盤ともいえる生産と生活の「つながり」を復活させることは重要なテーマではあるが、労働力を失った現在の里山ではほぼ不可能と言わざるを得ない。

しかし、希望の光はある。それは、都市住民も含めて、みんな里山が好きという点だ。それは里山再興のヒントでもある。

里山というと、高齢者ばかりで集落の維持が困難な「限界集落」といって言葉を思い浮かべるが、実際の里山にはまだまだ豊かな「力」がある。しかし、日本の社会システムが都市をベースとしているために、潜在力としてある「力」を發揮できないだけである。

都市と農村の対立を越えた里山再興

切り離された都市と農村を再び結び付け、里山に都市の若い労働力や資金を投入すれば、再興は不可能ではない。そうした試みは、少しずつではあるが生まれている。例えば、カナダで誕生したモデルフォレスト運動もその一つだ。

モデルフォレスト運動は、森林そのものではなく、流域を単位に、林業団体や環境保全団体、上下流住民など地域の利害関係者が参加する、森林を核とした持続可能な地域づくりの実践活動で、持続可能な森林経営を目指すものだ。日本では、二〇〇六（平成十八）年に京都府が日本初の推進団体として「京都府モデルフォレスト協会」を設立している。

この運動は、企業や都市住民などが労働力や資金を提供し、里山が培って



日々の暮らしも自然に彩られている里山

を感じるからである。私たちの生活は、物質的には格段に豊かになり、かつてないほど便利になっている。特に、昭和三〇年代の高度経済成長期以降、急速に豊かに便利になってきたと実感できる。その一方で、何か大切なものを失ってしまったと感じることがある。生活の豊かさを享受しつつ、「このままで良いのだろうか」と、誰もが感じ始めているのだ。これは近代的価値観が大きく揺らいでいることを示している。快適性や利便性を追求し、モノがあふれば豊かになるという価値観に、多くの人が疑問を持つようになったのだ。

失ったものとして、かつ再び創り上げなければならないものとしての価値が「関係価値」である。「関係価値」とは、なくなつて初めてその価値を認識するものだ。例えば、自然や環境、安全・安心などは存在して当たり前で価値であるが、知らず知らず失い、気が付くと困ってしまう価値である。

私たちは、自然や環境などからダイヤモンドのような交換価値や水のような使用価値を享受することはないが、それとの「つながり」が切れることで初めて価値を知る。それが「関係価値」であり、それを取り戻す、つまり関係を結び直す作業が求められているのだ。

二十一世紀の里山は決してノスタルジックの世界ではない。利便性を提供してくれる都市の存在を前提としながら、都市では得られない豊かな自然を提供する「場」である。その意味で、里山も都市の一部であるし、都市と農村という対立を越えた新しい「関係価値」といえる。

このように、新たな里山の構築とは、都市と農村、あるいは消費地と生産地の新たな関係の構築であり、物質的豊かさや利便性の追求ではなく、結び付くことで豊かになるという「関係価値」を生み出すことでもある。

profile 阿部健一 あべけんいち

1958年愛媛県生まれ。総合地球環境学研究所教授。大学院を修了後、京都大学助手、助教授等を経て2008年から現職。専門は環境人類学・相関地域研究。主な共著書に、『モノの越境と地球環境問題』などがある。

森林の町で守り続けられる 「日本のいななか」

《鳥取県智頭町新田》

杉林と棚田、清らかな水が流れる小川といった、絵に描いたような里山の風景が広がる新田。ここでは、住民全員による農業・林業体験の交流事業や人形浄瑠璃芝居の上演、カルチャー講座の開催などで、古き良き「日本のいななか」が守り続けられている。



かやぶき屋根の家がほっとした気持ちにしてくれる。

みどりの風が吹く 「疎開」の町

岡山と鳥取の県境、杉の木が生い茂る林業の町が智頭町だ。岡山駅から鳥取駅行きの特急列車に乗って一時間あまり。そのまま乗り過して三十分もすれば、鳥取駅に着く。列車の旅ならその程度の時間だが、車窓に広がる風景は、キャッチフレーズに「みどりの風が吹く『疎開』のまち」とあるとおり、緑に囲まれ、しかもどこか懐かしい昭和の香りがする。

智頭町は六つの町村が合併した町で、新田は標高四四〇メートル以上と、山林を切り開いてできた場所に位置する。開拓が始まったのは今から約三百五十年前の江戸時代で、石積み棚田と杉林がトレードマークだ。

「ひずみ」が生じてしまう。とはいえ、十人十色というようにさまざまな意見があり、また毎日顔を合わせる仲間だけに、多数決ですべてを決めるのではなく、少数意見も取り入れながら運営している。「それが苦労なんです」と、岡田さんは笑いながら語った。

人形浄瑠璃芝居や カルチャー講座で、 独自の文化を発信

新田には、江戸末期より人形浄瑠璃の文化が継承されてきた。山あいの集落だけに、人々は身近な娯楽として、自らが人形の使い手となり、みんなで観賞した。

今でも徳島の有名な人形師の天狗久天狗弁（明治・昭和期）の手による人形の頭も伝わっており、予約すれば上演してくれる。その舞台が、先ほど紹介した「清流の里新田」であり、人形を巧みに操るのは住民たちである。

また、NPO法人設立と同時に、毎月一回著名人を招いてのカルチャー講座を開催してきた。講師は、弁護士や国会議員、大学教授、実業家など、さ

戦後、日本経済が右肩上がりに成長していた時代、住宅用木材の需要は増え、林業が盛んだった。しかし、徐々に単価の安い輸入木材に市場を奪われ、日本の林業は総じて活気を失った。智頭町も例外ではない。一九五五（昭和三十）年をピークに人口は減少の一途をたどった。

新田ならではの「いななかの 魅力」をアピール

過疎化していく地域の姿を見て、「これではいけない」と立ち上がったのは、集落に住む人々だった。林業ではとても生計が立てられない。だから、若者はみんな故郷を後にする。若者を見送った年配者たちにしても、ただひっそりと暮らしているだけではいつの日か住民がいなくなってしまうかもしれない。

そんな危機感にも似た切実さで、何とか就労の場をつくるつもりだった。一九九一（平成三）年に大阪いずみ市民生活協同組合（現在、三十八万世帯が会員）との交流事業を始めた。これは、新田ならではの「いななかの魅力」を売り出して、都会の人に里帰り気分を味わってもらったり、農業や林業体験をしてもらったりして、新田をアピールするのが狙いだ。

まさまな分野の第一線で活躍する人たちだ。講師の選定から交渉、講座の告知や聴衆集めも、すべてNPO法人で行っている。

智頭町では今、森林の中で子どもたちを自由に遊ばせる「森のようちえん」や、森林の持つ癒しパワーを活用した「森林セラピー」など、まちのシンボルである森林を活用した試みを実施している。

その中でも、豊かな自然を生かした体験交流事業や人形浄瑠璃芝居上演、カルチャー講座といった独自の文化を発信してきた新田は、「独特の存在感」を放っている。それを支えているのは、「いななかの魅力」を自ら楽しんでいる新田の人たちである。

（文・藤沢享乃・広島市在住）



地元の人たちの力で開催された「田んぼの学校」

たことだが、「全国初の集落型NPO法人誕生」というお墨付きまで付いた。「高齢化率六〇パーセントで、しかも五十名の住民しかない集落で何ができるか。そう思う人もいるかもしれないが、現役世代でない私たちだからこそ、次の世代を見据えて頑張れることがあると思うのです。自分のための第二の人生を楽しむのもいいですが、自分以外の人のために時間や労力を使う存分かけられるのは、子育てを終えた私た

当時町議会議員だった岡田一さん（現NPO法人新田むらづくり運営委員会会員理事）を中心に、宿泊・飲食ができる「人形浄瑠璃の館」や「清流の里新田」、ロジ「とんぼの見える家」を建設し、集落の中心を流れる白坪川の親水公園整備などを行った。

住民全員で NPO法人を設立

都市との交流を続ける中で、二〇〇〇（平成十二）年にはNPO法人新田むらづくり運営委員会を設立した。このNPO法人で特徴的なのは、新田に住む十八世帯約五十人（二〇一〇年現在）の住民全員がメンバーであることだ。自分たちの集落は自分たちで守る。だからこそ、誰一人欠けてもいけない。それがこの会の趣旨である。後で分か



身近な娯楽として親しまれている人形浄瑠璃

離島自立の「遺産」が形成する 里山の光景

《島根県西ノ島町》

日本海の断崖の稜線に広がる緑地で草を食む牛馬の姿。その光景は、離島での自給自足を実現するために生み出された里山の社会システムの「遺産」であり、現代においては多くの人々の心を癒している。



西ノ島町の風物詩ともなっている放牧馬

断崖の緑地で 草を食む牛馬

島根半島の北東約六五キロメートルの日本海に浮かぶ隠岐諸島は大小百八十あまりの島からなる群島型離島である。このうち、人が住む島は西ノ島、中ノ島、知夫里島の島前と島後の四島で、そのうち島前で最も人口が多く、産業・交通の中心となっているのは西ノ島町である。

隠岐諸島は二〇〇九（平成二十一）年に日本ジオパークに認定された（本誌69号の特集参照）ように、世界的にも貴重な地質や景観、文化などを有している。

西ノ島では、島の西側の国賀海岸で激しい季節風による荒波によって削られた断崖や絶壁が連なっている。特に、北端に位置する摩天崖は、巨大なナイフで垂直に切り取ったような高さ二五七メートルの大絶壁で、海食崖では日本一の高さを誇っている。

自然の「力」の大きさに思わず感動する国賀海岸であるが、その景観に欠かせないのが断崖の稜線一帯に広がる緑の草地で草を食む牛馬の姿である。西ノ島町で古くから行われている放牧の光景だ。

放牧と耕作を 交互に繰り返す輪転式牧畑

『西ノ島町誌』などによると、現在は放牧だけだが、かつては放牧と耕作を交互に繰り返す輪転式牧畑が行われていたといふ。いつから輪転式牧畑が行われるようになったかは定かではないが、慶長十二（一六〇七）年の検地帳に記

録があることから四百年以上の歴史を持つとされる。

輪転式牧畑は、島の牧畑を粟山・空無山・空山・麦山の四つに区分し、四年間で一回りするシステムである。粟山はその年の作物が粟、稗、牧草などを主とした牧畑で、麦山はその年の作物が麦を主とした牧畑である。そして、空山は耕作されずに空いている牧畑で、ほぼ年中放牧地として利用される。空無山は空山とは反対に空きのない山で、ほぼ年中耕作されている放畑である。

四百年以上前の 合理的な社会システム

こうした輪転式牧畑が行われていたのは西ノ島がある島前だけであるが、輪転式牧畑を稼働させるためには組織的に耕作と放牧を輪転させることが不可欠であり、その意味において社会システムといえる。それが四百年以上前か

牧畑輪転図例

凡例 耕作 放牧

牧区	初年				2年目				3年目				4年目			
	3	6	9	12月	3	6	9	12月	3	6	9	12月	3	6	9	12月
A	栗山				空無山				空山				麦山			
	栗、稗(5中~9中)				大豆・小豆(6中~11上)				麦類(10中~6中)、大豆・小豆(6中~11中)				大豆・小豆(6中~11中)			
B	空無山				空山				麦山				栗山			
	大豆・小豆(6中~11上)				麦類(10中~6中)、大豆・小豆(6中~11中)				栗、稗(5中~9中)				栗、稗(5中~9中)			
C	空山				麦山				栗山				空無山			
	麦類(10中~6中)、大豆・小豆(6中~11中)				栗、稗(5中~9中)				大豆・小豆(6中~11上)				大豆・小豆(6中~11上)			
D	麦山				栗山				空無山				空山			
	麦類(6中まで)、大豆・小豆(6中~11上)				栗、稗(5中~9中)				大豆・小豆(6中~11上)				麦類(11中~)			

出典：『西ノ島町誌』

この四つの区分は粟山、空無山、空山、麦山の順番で輪転する。そのため一つの牧では、粟や稗などを栽培する時は放牧していた牛馬を他の牧に移し、栽培が終わると、次の栽培が始まっている他の牧の牛馬を受け入れて再び放牧する。そして、次に大豆や小豆の栽培が始まると、放牧して



日本海の夕日を浴びる牧の牛たち



激しい季節風で形成された国賀海岸の断崖絶壁

訪れる人の心を癒す「ふるさと村」

《岡山県津山市阿波地区》

岡山と鳥取の県境にある津山市阿波地区の「大高下ふるさと村」は、昔ながらの里山風景を色濃く残す「心のふるさと」である。豊かな自然と、ゆったりと流れる時間を守るようとしている住民たちの手作りのもてなしが訪れる人を癒してくれる。

豊かな自然が残る 小さな山里

岡山県北の津山市中心部からさらに北へ車で約三十分。鳥取と県境を接する阿波地区は、中国山地の山並みにすっぽり包み込まれた、人口約六百人の小さな山里だ。豊かな自然が残り、春にはコシンの白い花、夏はホタル、秋は紅葉、冬は山々を彩る銀世界と、四季折々に異なる表情を見せてくれる。

豊富な自然を生かした、中国山地の水系を源流とした川での溪流釣りやパラグライダーなどのアウトドアスポーツも楽しめる。また、山あいにはわく温泉も満喫できる。

その阿波地区を奥へと散策していると、「大高下ふるさと村入口」の看板が見える。ここから先、山へと続く標高も満喫できる。

明治初頭には阿波村となり、以降、一村を通してきたが、二〇〇五（平成十七）年、加茂町、久米町、勝北町とともに津山市と合併して、百年以上にわたる阿波村の歴史に終止符が打たれた。

そんな阿波の一角に、「大高下ふるさと村」が誕生したのは一九七四（昭和四十九）年のことである。岡山県がふるさとの伝統集落の保存を図ろうと創設したふるさと村七カ所の一つに指定されたのが始まりだ。ふるさと村には他に備前市の「八塔寺ふるさと村」や高梁市の「吹屋ふるさと村」などが指定された。

ボンネットバスで タイムスリップ

大高下ふるさと村は山里の景観を生かした地域めぐりに取り組んできた。「護魅の駅」と書かれたこみステーションは木作りの柵がごく自然に周りの風景に溶け込む。かやぶぎの上に、丸石を置いた石置屋根様式で造られたバス停は、素朴な味わいを見せてくれる。屋根に



大高下ふるさと村を走るボンネットバス(写真提供:津山市)

くぎを用いない石置屋根は、昭和三〇年代前半の山村の民家で多く見られたものだといふ。

こつした村の取り組みを行政も後押ししてきた。旧阿波村は、村の豊かな風景に合わせてボンネットバスを購入し、JR因美線の美作加茂駅からふるさと村の大杉公会堂前の間を走らせている。レトロなバスが山里を縫うようにして走る姿は、まるで昭和の時代にタイムスリップしたかのようである。

時代とともに 変わりゆく風景

ふるさと村も開村してから四十年近くたち、村の姿も徐々に変わってきた。開村した当初は三十あまりもあつたかやぶぎ屋根も、今は数棟を数えるのみ。かやぶぎ屋根が多かつたころは、大高下や大畑地区などでは共同でカヤを所有し、それを使って村人たちが屋根をふき替えるなど、ふき替え作業も日常生活の一部分だった。しかし、生活の中

五〇〇メートルの大高下と大杉にまたがるエリアが、山里のたたずまいを残した大高下ふるさと村だ。山あいにかやぶぎ屋根の民家が点在し、道端には水車が回るのどかな光景が広がり、見る人の心を和ませてくれる。都会とは違う、ゆったりとした時間の流れを感じられる場所である。村内には、こつした山里を身近に感じられる施設として、明治時代の民家を利用した「阿波民具展示館」が設けられている。かやぶぎ屋根や民具を間近に見ながら、当時の人々の生活をしのぶことができる。

大高下ふるさと村の誕生

地区のほとんどが森林という阿波地区は、江戸時代には良質の材木の産地として知られ、藩の御用林としての役割を果たしてきた。また、豊富な材木に恵まれたため、木工品を手がける伝統職人・木地師の往来も盛んで、木地師の里としても栄えてきた。

からいりりが姿を消してかやぶぎの寿命が短くなつたこともあり、費用がかさむかやぶぎ屋根は減少の一途をたどっている。

こつして農村風景が失われつつある中、大高下ふるさと村を取り巻く状況も厳しい。ふるさと村の若者たちは地区外へ働きに出かけ、人口は二百人を切つた。行政の援助も少なく、ふるさと村の財政も厳しいのが現状だ。

それでも住民たちはふるさとへの心とむ景観を残そうと、イベントでもちを売つたり、阿波村時代の繰越金でやりくりして、活動を続けている。

ふるさと村ののどかな風景は、こつした郷土を愛する人々の手で守られ、大切に整備されてきた。そして今も、昔と変わらないゆつたりと流れる時間で訪れた人を出迎えてくれる。

(文・川西由香理・呉市在住)



ふるさと村に設置されている「護魅の駅」



白い布を広げたような布滝(写真提供:津山市)

人の営みで維持されてきた湿原

《広島県北広島町》

北広島町の八幡湿原は、長い歳月にわたって複雑な生態系と人の営みではぐくまれ形成されてきた湿原群である。乾燥化が進み、一度は消滅の危機に陥ったが、今、多くの人たちの手により自然な形で湿原を再生させる取り組みが始まっている。



100種類以上の動植物が生息する西日本最大の八幡湿原

人の営み作り出した湿原群

広島県西北端の北広島町。西中国山地に抱かれた標高八〇〇メートルの八幡地区には大小二十あまりの湿原が点在している。その湿原の総称が八幡湿原である。

西日本最大の湿原群である八幡湿原は、ヒロシマサナエやカキツバタなど、湿原特有の動植物が百種以上生息している自然の宝庫で、その点においても貴重な湿原とされてきた。

湿原は枯れた草木が泥炭となつて堆積することで形成される。六五〇〇〜八〇〇〇年前に形成され始めたという八幡湿原は、気の遠くなるような長い年月をかけて、一メートル以上の泥炭を堆積させてきたのである。

「八幡地区にこれだけの湿原が誕生した要因としては、高地にあるため西日この報告を受けて広島県は霧ヶ谷湿原の再生プロジェクトを発足した。このプロジェクトは、後に専門家、NPO法人、愛好家、地元住民などで構成する「八幡湿原自然再生協議会」へと移管されて活動が本格化していく。プロジェクトが目的に掲げたのは保護ではなく、湿原の回復と自らの力による再生である。まずは人為的に壊された湿原を回復させる整備として、二〇〇七（平成十九）年から取水せきや導水路を設けて湿原に水を導入するための工事が行われた。

その一方で長期的な視野にたつて、湿原を自然な形で再生させる仕組みづくりも進められた。これには八幡湿原の特色ともいえる「人との関わり」が何より不可欠だ。そこで取り組んだのが、霧ヶ谷湿原を中心にした観察会やガイドツアーなど、湿原と人との関わりをはぐくむ活動である。

と同時に、八幡地区の住民たちも湿原を守るうとさまざまな活動を展開してきた。「カキツバタの里づくり」は活動開始から十年目を迎え、初夏には美しいカキツバタの花を咲かせている。「八幡湿原を守る会」は、定期的に草刈りを行って、湿原本来の形を取り戻そうという地道な活動を続けている。



多くの花が湿原の四季を彩る。

道路開発が進み、湿原に土砂が流れこんでしまったのである。第二の危機は人間の生活が変わり、人が山を利用しなくなつたためだ。利用しなくなると、山や草原には木が生い茂り、湿原に供給される水の量が減少した。また、森林化により土壌が安定したため、湿原内の水路で浸食が進んだ。

そのため湿原は乾燥化が進行し、ノイバラやハルガヤなどによりやぶ状に覆われてしまったのである。その結果、八幡湿原の主な五つの湿原面積は、一九六四年の十五・五ヘクタールから一九八八（昭和六十三）年には六・一八ヘクタールへと半分以上に減少してしまう。

霧ヶ谷湿原の再生を目指して

消滅の危機を迎えようとしていた八幡湿原の再生は、二〇〇二（平成十四）年、西中国山地自然史研究会が八幡湿原の一つである霧ヶ谷湿原の調査に乗り出したことから始まった。調査の結果、研究会は、湿原が森へと変わりつつある一方で、湿原がわずかながら点在していることを確認し、今のうちに残された湿原に水を供給すれば、元の湿原に戻る可能性が高いという報告を出した。

本の中では比較的冷涼なことで、日本海の影響で降水量も多く、冷涼多雨を好む湿原が形成される条件がそろっていたことが挙げられます。ただし、北日本では湿原が手付かずの自然の中ではぐくまれてきたのに対し、八幡湿原の場合は、人の生活が密接に関わることで維持されてきたという大きな特徴があります。こう語るのは、八幡湿原にある「芸北高原の自然館」の白川勝信学芸員である。

かつて八幡地区の人々は、湿原の上流にあたる野山に入つては、畑の肥料として下草を刈り、燃料として木を伐採するなど、生活の場として利用してきた。これによつて野山の森林化が抑制され、湿原に水が流入し、湿原の活動が維持されてきたのである。人が自然を里山として利用することによつて、八幡湿原がはぐくまれてきたわけだ。

昭和の半ばに湿原消滅の危機

しかし、その八幡湿原も昭和の半ばになると、時代の波とともに消滅の危機にさらされた。

第一の危機は一九六四（昭和三十九）年から牧場として利用されたことだ。大規模草地改良事業の実施で、周囲の

新たな仕組みづくりへの挑戦

「今後の課題はこうした活動を生かすつ、湿原を維持するために草刈りをして終わりではなく、刈った草をバイオマスイエネルギーなどに役立てるなど、人間の生産活動が湿原を維持する。こうした仕組み作りが必要です」と、白川学芸員は話す。

かつて八幡湿原は人の生活の営みとの関わりの中ではぐくまれてきた。時代が変わつてもまた、人間が自然な形で里山を生活・生産の場として利用していくことが、本来の湿原の形を取り戻し、再生していくことになる。その取り組みは始まったばかりである。

（文・川西由香理・呉市在住）



高地の冬の厳しさが湿原の魅力を高めている。

住民が守る美しい

里山風景

《山口県下松市米川地区》

峡谷美と里山の風景

山口県下松市の市街地から県道四一
号を北へ約十五分。米川隧道を抜ける
と、峡谷の自然と未武川ダムが広がり、
川沿いには家々が立ち並び、下松市の
米川地区だ。

米川地区の人口は、一九五四（昭和
二十九年）の合併当時は約二二〇〇人
であったが、ほぼ五十年後の二〇〇五（平
成十七）年には約七〇〇人と、三分の
一に減少した。まさに、高齢化・過疎
化が進む地域だ。



ジョギングを楽しむ人の姿も多いダム湖

その一方で、かつて米泉峽と呼ばれ
た未武川ダムから上流の滝の口河川公
園周辺は、現在も紅葉やホタルの名所
として知られ、ダム湖周辺は市民がウ
オーキングやジョギングなどを楽しむ、
身近な憩いの場となっている。
この米川地区で、自然や環境の良さ
を次代に残していこうと活動しているの
が米川環境整備協議会だ。

地域の失われた自然を復活

米川環境整備協議会が発足したのは
一九九一（平成三）年である。未武川
ダムの完工を機に、地権者の会、立退
者の会、温見ダム観光整備委員会、米
川を明るくする会の四団体が一つにな
り、ダムを生かした地域づくりを進め
ることになったのが始まりだ。
まず手掛けたのは、開発で減少した
樹木を増やし、休耕田などで地域が荒
れるのを防ぐための植林で、市や地元
の「タタリクラブ」と共同で滝の口河川

公園にはヤマモミジとヤマザクラを植え
た。ヤマモミジを選んだのは、かつて県
内最大といわれた樹齢四百年余のヤマモ
ミジがあったことや、地区内に多く自
生することからだ。さらに協議会は独
自に、ダム湖の周囲と川沿いの休耕田
にヤマモミジやヤマザクラ、イチヨウを植
樹し、維持・管理を続けている。
また、ダム整備に伴う河川改修によ
つてホタルも減少したため、地元の「ホ
タル博士」の力を借りて養殖に取り組
んだ。手作りの飼育小屋で卵をふ化さ
せ、幼虫を育てて川に放流。地域の小
学生も飼育や放流を手伝うことで関心
を持たせている。
「自然界では卵がホタルになるのはわず
かパーセント。それが養殖によつて三
〇パーセント以上が川に放流できるまで
育ち、次第にホタルの数も増えました。
十年経過した今では、自然のままでも
ホタルが増える環境で、近年は各地か
ら放流の依頼が相次ぎ、養殖方法も紹
介しています」と、協議会代表の國弘
勝昭さんは話す。

里山の風景を 五十年先まで残す

米川地区の住民同士の結びつきは強
く、協力的な体制が構築されている。

協議会メンバーも地元住民だ。
ただ一人、地区外から参加するボラ
ンティアメンバーの八陣道雄さんは「米
川は美しいだけでなく人情も深い、い
い所。外部の者からするとうらやましい
と、米川の魅力を力説する。
自分たちが住む地域だから、幼いこ
ろから親しんできた美しい環境を守り
たいという、自発的な活動が作る環境
は、都市住民の目にはかけがえのない
ものに映ったのだ。
そんな米川地区は、八陣さんの推薦
がきっかけで、朝日新聞社・財団法人
森林文化協会の「にほんの里百選」に
選ばれた。当たり前のものとしか感じ
ていなかった地元メンバーにも、思いがけ
ないうれい出来事だった。
「三十年先か五十年先になるか、将来
に向けて少しでも昔からの環境を戻し
ていきたいという思いで、これから
も活動していきたい」と、國弘さんは
語る。
地域内は草刈りなどで気持ちよく手
入れされ、道祖神には常に新鮮な花木
が供えられている。こうした人々の営み
が支える米川の風景、「この良さを知り、
受け継ぐ次世代の人たちが増えてくれ
ることを願うばかりだ。
（文・齋藤さつき・広島市在住）

若者たちの地域づくり 5

学生たちの活躍が 地域の人気を集める 「ぞうぐらさん小学校」

《岡山県総社市》



子どもたちに「表彰状」を手渡す学生たち

岡山県南西部の総社市に1993（平成5）年開学した
岡山県立大学。「実学を創造し、地域に貢献する」こと
を教育研究の理念として掲げる同校には、「ぞうぐらさん
小学校プロジェクト」という、地元商店街の催しと連携し
たユニークなカリキュラムがある。

総社商店街は、古くから備中総社宮の門前町として栄え
た、歴史的な町並みが残る通りである。しかし、昭和40
年代をピークに昭和50年ころから徐々に衰退し、今では
人通りもまばらな通り道になっている。そうした中で、新
しい形でにぎわいを取り戻そうと、2005（平成17）年
からは秋に「れとろーど」というイベントが開催されてい
る。「れとろーど」では商店街の空店舗にさまざまな「店」
が出店し、2日間で約2万人の人出がある。
「ぞうぐらさん小学校」は「れとろーど」の人気店の一つ
で、空き家を小学校に見立て、学生たちが地域の子も
たちを対象にモノづくりのワークショップを開催するもの
である。ネーミングはカリキュラムを受講する「造（ぞう）
形デザイン学科グラ（ぐら）フィックデザインコース3（さん）
年生」を略したものだ。



子どもたちの表情も楽しそうな「ワークショップ」

岡山県立大学の山下明美教授がこのプロジェクトに取り
組んだのは2008（平成20）年からである。ゼミの大
学院生が地域のNPO法人で活動しており、「れとろーど」
への参加の相談を受けたのがきっかけだ。
「学生たちは、下宿生の半数以上は総社商店街の近くに住
んでいながら、普段は学校と家とアルバイト先の往復で、

地元の人とあまり接することがありません。だから、『れ
とろーど』への参加は地域の人々と交流し、総社の良さ
を知るいい機会になるのでは思ったのです」と、山下教
授は説明してくれた。参加は、課外活動では時間的に難し
いこともあり、授業の一環として取り組むことにした。そこ
で、コミュニケーションデザイン¹、ブランディング²などに
関連してイベントのブランディングを実践で学ぶという観点
から参加することにした。

こうして始まった「ぞうぐらさん小学校」は、小学校の
ように時間割を作り、国語「お絵かき伝言ゲーム」、体育
「運動しながらアイス作り」など複数の「授業」や給食の
時間まである楽しい内容だ。教科の内容企画から材料調達、
教材制作、キャッチフレーズづくり、ポスター、チラシ、
Webのデザイン・制作まで含めたイベント実施一式を学
生たちの手で行っている。

「授業なので、最初は学生たちにもやらされている感があり
ますが、現場へ行くといきなり力を発揮して頑張ってく
れます。アクシデントが起こっても自分たちの力で解決す
る方法を考えています」と、山下教授は学生たちが見せ
る主体性に驚かされたという。

また、学生たちは「れとろーど」の会議にも出席し、
実施場所として借りる旧森下病院の掃除や準備などで、地
域へ出かける機会も増えている。

「コミュニケーションが大事と口で言ってもなかなか伝わ
らないのですが、イベント会場ではアルバイト先の接客マニ
ュアルなどと違う対応が必要になります。この実体験はコ
ミュニケーションとデザインを学ぶ上でも大きな意味があ
ると思います」と、今年から山下教授と「共担」となっ
た中西俊介准教授も口をそろえて言う。

地域の人たちからも好評と期待を受けている「ぞうぐら
さん小学校」プロジェクト。ボランティアではなくカリキュ
ラムとして取り組むことで、継続した地域とのつながりを
作る成功例といえそうだ。（文・齋藤さつき）

1 コミュニケーションデザイン：メッセージを発信する際に、最大効果を得られるように媒体や中身、タイミングなど全体構成を考えること。
2 ブランディング：顧客に価値のあるブランドを構築すること。



「価値創造」で新しい農業ビジネスに挑戦する

株式会社村上農園 社長
村上清貴 《広島市》

企業が成長するための「確執」と企業戦略

それが創業者にとって不愉快なことは十分に分かっていた。しかし、企業として成長するためには、事業の新しい柱を育てることが不可欠だった。

テーブルを挟んで向かい合った創業者の目をしっかりと見つめていると、企業家の脳裏に十数年前の光景が浮かんできた。ウレタンスポンジを使用せずに根同士を絡み合わせる、独自の「根がらみ栽培」で生産した「かいわれ大根」を丁寧パッケージ詰めする創業者の顔。そこには、自らかいわれ大根の栽培・販売事業をスタートさせ、業界トップシェアの企業に育てた自信と自負が満ちていた。

企業家にとって、その実績と努力は高く尊敬すべきものだった。しかし、それだけでは企業のさらなる成長は見えなかった。

「尊敬してやまない創業者ですが、会社の黒字化という使命を達成するために、自分の考えを真正面からぶつけ、実践してきました。それ以降、創業者との間に『確執』のようなものが生まれた感じがしていますが、それは企業の成長のためには避けられないことだったと思います。」

企業家は筆者の目をしっかりと見つめながら、そう語った。その表情からは、企

業を成長させるためにシビアな経営判断を繰り返してきた「企業家魂」のようなものが伝わってくる。

広島市に本社がある株式会社村上農園の村上清貴社長（50歳）である。経営者としては若手だが、インタビューに答える言葉の端々からは熟考した戦略がうかがえる。

全国的な企業から叔父の会社に転職

村上社長は一九六〇（昭和三十五年）に山口県熊毛町（現在の周南市）で生まれた。旧姓は田村で、今から三年前に創業者である村上秋人（あきと）会長（83歳）の養子となった。

地元の高校を卒業すると、村上社長は広島大学に進学するとともに、叔父である村上会長宅に居候することになった。大学に入学した前年、村上会長はかいわれ大根の生産・販売事業をスタートさせており、村上社長も卒業までの四年間はかいわれ大根栽培のアルバイトに汗を流していた。

大学を卒業すると、村上社長は株式会社リクルートに就職し、関東地区を中心に企業の採用広告事業や通信回線事業などを担当した。入社して十年目の一九九二（平成四）年、村上社長のもとに村上会長から連絡があった。村上農

園に入社してくれないかというものだった。村上会長には子どもがおらず、後継者をどうするかが重要な経営課題になっていたのだ。

「リクルートの中でもいろいろな仕事を担当してきましたから、新しいものに順応することには自信がありました。だから、会長から話をもらったときも、自分にとっては新しいチャンスだと考えました。」こうして翌年十月には、当時所属していたリクルートの関連会社を退社し、村上農園に入社した。

かいわれ大根の爆発的なブームと価格の下落

村上農園の「原点」は一九三九（昭和十四）年に村上会長の母親が始めた村上尚世農園で、刺身のつまなどに用いる紅夕芥を栽培していた。その後、第二次世界大戦で一時休業したものの、戦後はいち早く栽培を開始し、京阪神市場の約九〇パーセントの販売ルートを獲得していた。

村上会長は、母親を引き継いで紅夕芥の栽培に従事していたが、量産化できる新しい作目を模索していた。そこで着目したのが、当時、料亭の高級食材として使われていたかいわれ大根だった。これを一般家庭でも食べられるように栽培しようとしたのだ。

profile

村上清貴 むらかみ・きよたか

1960年山口県熊毛町（現・周南市）生まれ。広島大学を卒業後、リクルートに入社。93年に村上農園に入社し、農場長、取締役東日本統括部長、常務取締役を経て、2007年に社長に就任。村上農園は、資本金は1,000万円、従業員数は250名、売上高は30億円（2009年）である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：久保木貴久生（広島市在住）



村上農園が開発している機能性野菜

かいわれ大根の試験栽培に成功した村上会長は一九七八（昭和五十三）年には村上農園を設立し、全国向けに生産・販売を開始した。かいわれ大根はピリツとした辛みで人気を博し、一九八三（昭和五十八）年には爆発的なブームを巻き起こした。

しかし、その人気に着目して参入企業が相次いだため生産過剰となり、翌年の売上は急減した。その後、生産過剰によって全国的に生産拠点の淘汰が進む中で、村上農園は各地の生産施設を買収しながら再び売上を伸ばしていった。しかし、一度下落した価格が戻ることはなく、売上高は伸びるものの、収益性は低いまま推移していた。

新商品を開発して事業の柱に

村上農園に一社員として入社した村上社長は、まず広島県の農場で生産に従事した後、神奈川県の小田原農場に常駐して、大消費地である関東を中心に営業活動を展開した。

「そこで感じたのは、収益性の低いかいわれ大根だけに依存するのではなく、新商品を開発して新しい事業の柱にしなければ成長できないということでした」

そのとき着目したのは豆苗だ。豆苗はエンドウ豆の新芽で、ビタミン・ミネラル・食物繊維のバランスに優れた緑黄色野菜である。ポール・タラレー博士の協力を得た村上農園は「スプラウトシリーズ」の生産・販売を一九九九年に開始するとともに、日本国内での独占ライセンス契約を締結し、二〇〇一年（平成十三年）にはさらに機能性を高めた「フロコリースーパー」スプラウトの生産・販売を開始した。

「スプラウトシリーズやフロコリースーパー」スプラウトは新野菜としてSNSなどで紹介されるとともに、その品質や機能性が高く評価され、スーパーなどに置いてもらえるようになりました。

地元大学と共同でビタミンB12含有野菜を開発

スプラウトを契機に、村上農園と一緒に研究開発をしたいというパートナーも生まれてきた。村上社長の母校である広島大学がビタミンB12を含んだ野菜の栽培を共同で研究・開発しないかと提案してきたのだ。

ビタミンには十三種類あるが、そのうちビタミンB12だけは野菜や果物にまったく含まれておらず、動物性食品から摂取せざるを得ない。そのため、野菜を

色野菜である。すでに生産・販売している同業者はあったが、村上農園は水耕栽培で生産することで安くて一年中安定した出荷を実現し、数カ月でナンバワン・ブランドの地位を構築した。

その直後、村上農園に激震が走った。大阪府の堺市で「O157」による食中毒が発生し、その報道によりかいわれ大根の販売が大幅に落ち込んだのだ。村上農園も大きな影響を受け、一九九七年（平成九年）にはかいわれ大根の売上は四分の一にまで激減した。

ニッチな野菜を自社ブランドで販売

そうした中で、村上社長はすべての農場で豆苗の生産・販売にシフトするとともに、ハーブやサラダ専用ほうれん草、サラダ野菜として人気の高いルッコラ、エスニック料理に欠かせない香菜（シャンツァイ）などの開発に取り組んだ。

「自分たちで企画し、仕様を決定し、自分たちのブランドとして販売しようとしたのです。それを生かせるのはニッチな野菜です。とはいえ、自社の農場ではなかなか栽培できません。そこで近隣の農家の方々に生産していただき、それを村上農園のブランドで販売するようしました」

農家に生産を委託すると収益性は低くなるが、それでもかいわれ大根よりは中心とした食生活を好む高齢者やダイエット中の人には不足しがちで、悪性貧血や神経障害、動脈硬化などを引き起こすこともある。

そうした問題を解決するために、ビタミンB12を含んだ野菜の栽培技術を開発しようとしたのだ。

共同研究には二年の歳月を要したが、二〇〇四年（平成十六）年には国内で初めてビタミンB12を含んだ野菜「マルチビタミンB12 かいわれ」の量産化に成功した。

機能性野菜こそが成長の源泉

「こつとした一連の流れの中で、村上農園が取り組んできた、あるいは取り組むべきジャンルも明確になってきました。それは機能性野菜です。味が良いことはもちろんですが、それと同時に有用成分が豊富な野菜です。それを開発・販売することが村上農園の成長の源泉であると確信したのです」

健康に良い機能性野菜といっても、多くの人がいがいつでも手軽に食べられるようにならないと意味はない。その点、村上農園には六十年以上にわたって発芽野菜を栽培してきた量産化技術と開発力がある。それは一般農家ではできないことだ。

「キャベツやレタスを栽培しても農家には



新しい農業ビジネスの現場に立つ村上社長

高かった。これにより一九九八年（平成十一年）にはかいわれ大根・豆苗・ハーブ等の新商品の三本柱を打ち立てるとともに、わずか一年半で黒字転換を達成することができた。

「自社で開発し、栽培し、売るといった一連のプロセスを構築するのはなかなか大変でしたし、失敗もありました。しかし、これを経験することで農産物の商品化・販売のノウハウが自分のものになったと実感しました」

それは同時に、村上会長が築いてきた路線からの「飛躍」でもあった。

米国生まれのスプラウトを日本で独占販売

事業構造が少しずつ転換する中で、その方向性を決定付けたのは一九九九年（平成十一年）である。この年、村上社長と会長は米国のジョンス・ホプキンス医科大学のポール・タラレー博士を訪問し、米国で大ブームとなっている発芽野菜スプラウトの生産ライセンスを正式に要請したのだ。

ポール・タラレー博士はガン予防の世界的な権威で、フロコリーだけに含まれるスルフォラファンという機能成分の発見者でもある。

スルフォラファンには発ガン物質を無害化したり、有害な活性酸素を体外に排出させたり、しかし、一般農家では栽培・販売できないニッチな作物なら高い競争力があります。しかも、消費者に認知してもらい、食べてもらうというマーケティングでは優位性もあります。その意味で村上農園は従来の農業を越えた新しい農業に挑戦していると自負しています」

村上農園の本社は広島市郊外の住宅地の一角にある。日本に七カ所の農場を有し、米国にも関連会社がありながら、本社は平屋建ての「ごんまり」としてのものだ。

撮影のために隣接するビルハウスに向かう時、村上社長は隣家の奥さんに「こんにちは」と笑顔で声を掛けた。

その姿からは、農業ビジネス分野で厳しい戦いを展開しながらも、いつまでも創業の地を大切にしたいという思いが伝わってくる。

品質重視の企業マインドを共有し、 純国産の高性能救命艇を開発

《山口県下関市》

あえて「独立」の道を選択

青い海が広がる山口県長門市は古くから水産都市として栄え、周辺海域で捕れる豊かな海の幸は多くの人たちの味覚を満たしてきた。その中心市街地から下関市方面に約三十分車を走らせると、入り江を利用した造船所が見えてくる。FRP（繊維強化プラスチック）船舶の製造・販売や救命艇の製造・販売などを行っている株式会社ニシエフである。

ニシエフは一九七一年（昭和四十六）年に創業したFRP造船の老舗メーカーである。前身は西日本エフアルビト造船株式会社で、日本の漁船が木造からFRPに転換する中で事業を拡大し、日本海沿岸では屈指のFRP造船所に成長していった。

しかし、FRP船は耐久性が高いこともあって、昭和五〇年代前半の全盛期を過ぎると受注は減少傾向に転じ、親

会社は撤退を決定した。そうした中で、西日本エフアルビト造船は「独立」の道を選択し、一九九九年（平成十二年）にニシエフとして再スタートした。

純国産の救命艇を目指す

「当時は、売上の六〇パーセント以上がFRP船の受注に依存する造船会社で、受注がないときの仕事をどうするか大きな課題でした。そこで着目したのが貨物船などに搭載される救命艇です。」
こう語るのにはニシエフの堀井淳社長である。堀井社長はもともと親会社の技術者であったが、前社長のたつての依頼もあって、親会社を退職して二〇〇二年（平成十四）年に社長に就任した。

貨物船などには、火事などで緊急避難が必要となることも想定して救命艇が搭載されている。かつては救命艇をワイヤーに吊り下げて海面に降ろす方式が一般的であったが、船舶の大型化などでフリーフォール（自由降下）式救命艇が主流となってきた。

フリーフォール式救命艇は船舶にセットしたダビット（滑り台）を使って救命艇を一気に海面に降下させるものだ。離脱操作は救命艇の内部で行うため、つながっていった。「船員の安全性を最重視したい」という船主会社の考えに応える救命艇と評価されたのだ。

ニシエフは、こうした高性能な救命艇の開発と同時に、救命艇で降下する時の人体への影響なども研究している。三〇メートルもの高さから海面に一気に降下すれば、搭乗している船員はかなりの衝撃を受ける。しかし、その研究はこれまでほとんどなされていなかった。それを山口大学や山口県立大学、県の産業技術センターと共同で進めているのだ。「これからは、負傷した船員はどうすればいいのかといったことも研究すべきだと思います。」

こう語る堀井社長の言葉からは、船員の生命を守る救命艇だからこそ、より高い性能と安全性を追求しなければならぬという強い使命感が伝わってくる。



30メートルもの高さから降下するフリーフォール式救命艇（写真提供：ニシエフ）

船員全員が迅速かつ確実に脱出できる。

当時、ほとんどの救命艇は海外の技術を導入して製造していたが、ニシエフは純国産を目指して大学や研究所などとの共同研究を進めた。そして、二〇〇五（平成十七）年には純国産の三十人乗り救命艇の実用化に成功するとともに、より高性能で安全性の高い救命艇の開発に取り組んでいった。

「救命艇市場でも価格の安い中国製がシェアを拡大しており、国内で製造しているのはわずか二社です。中国製に対抗するためには性能と安全性を向上させるしかありませんし、それを評価してくれる船会社は必ずリピーターになっていただけると考えたのです」と、堀井社長は振り返った。

品質重視の企業マインドを共有

価格の安さではなく性能と品質で競争しようというシエフに「追い風」が吹いたのは二〇〇六（平成十八）年だ。IMO（国際海事機関）が鉱石や石炭



船員の安全性を最優先した救命艇（写真提供：ニシエフ）

などを運搬するバルクキャリア（ばら積み貨物船）の新造船についてフリーフォール式救命艇の設置を義務付けたのだ。さらに、入港に際しての安全点検の強化によって、救命艇にも高い品質が求められるようになった。

この流れを受けて、ニシエフは株式会社関係ヶ原製作所、エフ・オール・ピー・サービス株式会社と連携し、より高性能

なで安全性の高いフリーフォール式救命艇の開発を本格化していった。関係ヶ原製作所はダビットの開発・製造を行い、エフ・オール・ピー・サービスはFRPの高い成型技術を有している会社だ。「この連携で大きな力となったのは、品質を重視するという企業マインドを共有していたことです。救命艇は船員の生命に関わるもので、それを支える品質をダウンさせることなどできません。したがって、常に高性能なものを求め、部材を含めて安易な妥協はしませんでした。その結果として、コスト低減は永遠のテーマとなるでしょうが、性能と品質は必ず評価されると確信していました」と、堀井社長は語った。

船員の生命を守る ミッションを追求

性能と品質にこだわった連携は着実に成果を上げ、二〇〇八（平成二十）年には海上三〇・五メートルからの降下テストもクリアした。国内企業のみでの連携で成功させたことは、救命艇の技術で先行していたヨーロッパのメーカーを驚かせたといえる。

こうして開発されたフリーフォール式救命艇は、これまでの販売先であった造船会社だけでなく、船舶の所有会社からも高く評価され、具体的な注文に



救命艇の前に立つ堀井社長

伝統的な茶文化を世界に発信し、 新たなビジネス展開を図る中村茶舗

〈島根県松江市〉

伝統的な日本の茶文化を世界の人たちに知ってもらい、お茶を楽しんでもらいたい。そうした思いを実現するために、百二十年以上の歴史を持つ中村茶舗は海外展開を図るとともに、そこから新しいビジネスを実現しようとしている。

日常的に抹茶を楽しむ 松江の人たち

日本を代表する「湖都」として知られる島根県松江市は、夕日が美しい宍道湖や堀川遊覧、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）など数多くの観光資源を有する国際文化観光都市である。その松江市で現在、脚光を浴びているのが松江城だ。来年度まで「松江開府四百年記念事業」が展開されるとともに、松江城の国宝指定に向けた市民の動きも活発化している。

松江城というと、すぐに思い浮かぶのが松江藩七代藩主の松平不昧公である。不昧公は薬用ニンジンの栽培などで地域経済の振興を図るとともに、茶人として茶文化の普及に努めた。そのため、松江市を中心とする島根県東部では一般家庭でも日常的に抹茶が飲まれている。

から信頼を得るためには品質管理の国際基準（ISO9001）を取得することが欠かせなかった。そのため、中村茶舗は「丸」となつて努力し、まる一年を掛けて二〇〇五（平成十七）年にISO9001を取得した。

こうしてタイへの輸出がスタートすると、今度は日本茶そのものへのクレームが発生した。日本茶は、水やお湯に溶かすと、時間の経過につれて色が変わり、沈殿してくる。しかし、タイ人にはそれが理解できず、「これは粗悪品だ。色が変わらないで、すぐに溶けるお茶が欲しい」といった注文が寄せられたのだ。

「困りましたでしたが、私は正直に、それが本当の日本茶だと説明し、理解を求めました。そうしないと、永久

そんな松江市で、茶文化を世界に発信し新たなビジネス展開を図っているのが有限会社中村茶舗である。

伝統を守りながら 革新を図る

「京都・宇治の茶問屋から分家し、松江で開業したのは明治十七（一八八四）年です。開業者の末吉は茶の鑑定名人として有名であるとともに、日本で初めて電動で抹茶を碾く臼を発明したことも知られています」。こう語るのは四代目の中村寿男社長である。

伝統を守りながら革新を図るといふ開業者の精神は脈々と受け継がれ、近くの神社で合格祈願を済ませた「合格茶」や、小泉八雲のひ孫である小泉凡氏（島根県立大学短期大学部教授）と共同開発した「ラフカディオ珈琲」などを商品化してきた。

日本茶を飲むことを ファッションに

こうそをつくことになると思ったからです。その結果、タシ丁社長とのコンタクトは途絶えてしまいました」と、中村社長は当時を振り返った。

ところがある日、中村社長のもとにタシ丁社長から連絡が入った。内容は、中村社長から日本茶を教わりながら、自分たちが直接お客さまに売ることになったというものだった。

早速タイに行ってみると、まるで化粧品売り場のような店舗がデザインされていた。日本に比べて物価が非常に安いタイでは、百グラムで五百円もする日本茶は簡単には売れない。そこで、日本茶が体に良いことをよく知っているタイの富裕層をターゲットに、日本茶を飲むことをファッションにしようと考えたのだ。また、日本茶をより深く理解してもらうために文化講座の開催も計画されていた。

こうして二〇〇七（平成十九）年にはバンコクに第二号店がオープンした。お店の名前は「Chahon」で、日本茶をまず味わってもらうために店内には抹茶カフェも併設されていた。その後、Chahonブランドは健康と美容に良いというイメージを浸透させてファン

新しい市場を求めて 海外展開

しかし、日本人のライフスタイルの変化などでお茶の消費は減少し続けており、中村茶舗も新しいマーケットを

開拓することが求められていた。そうした中で中村社長が模索したのが海外への店舗展開だった。とりわけ注目していたのが、親日的で、同じ仏教国であり、お茶に対しても理解を示してもらえそうなタイだった。

「そんな時に、フードコンサルタントをしているタイの人からタイで輸入食料会社を営営する女性実業家のタシ丁社長を紹介され、タイで日本茶を販売することになりました。しかし、事業を進めるとなると、さまざまな問題が発生してきました」と、中村社長。

まず、世界各国と同じようにタイも食品輸入が厳しくなっており、タイ



を増やし、現在では六店舗にまで拡大している。

海外の感覚を逆輸入し、 国内で新しい展開

こうしたChahoの活動はタイ国内でも注目され、二〇〇九（平成二十一）年には、タイで毎年開催されている国際展示会で中村社長はタイ国王室ソーンサワリ王妃に抹茶を点てて差し上げた。「日本文化を伝えながら、良質な日本茶をタイに普及させていることが評価されたのだと思います」と、中村社長は言葉を続けた。

さらに、Chahoは中村茶舗そのものにも大きな変化をもたらした。抹茶リング味や抹茶ミョーといったChahoの斬新なメニューが刺激となつて、抹茶ロールや抹茶・玄米茶ゼラードといった新しいスイーツを開発し、ネットで販売するようになったのだ。

「伝統的なお茶を生かした新しいブランド商品をタイから逆輸入することで、若者を中心に新しい展開を生み出したと思います」と、中村社長は今後の展開を語った。

日本茶の伝統文化を海外に展開しながら、常に新しい感覚を日本に持ち帰ろうとする中村茶舗の取り組みは、日本の中小企業の海外展開に多くの示唆を与えている。



タイから「逆輸入」した新しいスイーツブランド



120年以上の歴史を持つ松江市の本店

「町を創るのは人」の思いで 人が集まる拠点づくりに取り組む杉田真理子さん

商店街に人の波を取り戻そうと、第一のふるさとで事業を始めた一人の女性は地方都市の無限の可能性を確信して新しい拠点づくりに取り組み、地域を動かす「チカラ」をも生み出そうとしている。



profile

杉田真理子 すぎた まりこ

1975年大阪府生まれ。高校を卒業後、オーストラリアに語学留学し、帰国後は米国で洋服の輸入販売業を開始。1996年に米子市に古着屋をオープンし、現在は鳥取・島根両県に3店舗を展開している。2009年には中心市街地活性化事業の主体となる株式会社スカイ米子を設立し、社長に就任。

文・平光 穰（広島市在住） 写真・白根俊彦（米子市在住）

第二のふるさとで 人が集まる拠点づくり

古くから商業の町として栄え、「山陰の大阪」とも呼ばれた鳥取県米子市。かつてにぎわいの中心地だった都心の商店街も、郊外へ進出する店舗や施設が増えるにつれ、盛時の活気は失われつつある。その一方で、再び商店街に人の流れを呼び戻す取り組みも始まっている。水運の面影を残す旧加茂川に沿う四日市町の「米子ほんどおり」も、そうした商店街の一つだ。

その象徴的な活動として、旧今井書店本通り店の敷地と建物を再利用した複合施設「スカイビル」が、二〇一〇（平成二二）年三月にオープンした。衣料品、雑貨、美容サロン、オフィス、屋上広場が集まり、今までになかった出会いを生む拠点として期待が集まる。

国の支援事業にも認定された市街地再活性化事業で、その仕掛人が杉田真理子さんだ。大阪生まれの杉田さんだが、「米子は父親の出身地。祖母やいとこたちもいて、夏休みと冬休みは一人で飛行機に乗り、往復していました。だから、一年のうち二カ月間は米子で過ごしていましたね」と、笑顔を見せる。

高校生時代はフリーマーケットの出店者として名前が知られ、卒業後はオーストラリアへ語学留学した。古着と異文化の魅力に触れて帰国後、ロサンゼルスにも渡り、輸入ビジネスの足掛かりも得た。その杉田さんが自分の一号店をオープンさせたのが米子市だった。

「昔から親しんでいたのはもちろんですが、大阪より資金が少なくてすむし、競争相手が少ないから価格競争もさほど激しくない。都会にはない人の親切や協力にも恵まれ、一九九六（平成八）年、国道九号沿いに古着の専門店を立ち上げました。二十一歳の時です」

若さゆえの自信もあったが、自分の好みで商品を選ぶやり方は当時の米子では受け入れられず、失敗した。その経験から購買者の立場の商品構成へ方向転換して、三カ月後には売上を伸ばした。店舗も順調に拡大して、二〇〇三（平成十五）年には有限会社Annoiak（アノアック）として法人化した。

現在は古着だけでなく、オリジナルデザインの商品も扱い、鳥取・島根県内で三店舗を経営している。会社代表として責任は増したが、苦勞を苦勞と思わない天真らんまんさんが、杉田さんの姿勢であり、原動力になっているようだ。

商店街のようなビルから 山陰の元気を全国へ発信

複合施設スカイビルは、再開発事業の主体会社である株式会社スカイ米子が運営に当たっており、その代表取締役も杉田さんである。四階建ての建物は旧今井書店ビルを再利用したが、印象は大きく変わった。アーケード側から全体は見えないが、旧加茂川沿いへ回ると白い建物に「sky」の文字が映え、若々しい表情を感じさせる。物を並べれば売れるという時代ではない。スカイビルは単なる物販の施設というよりも、商店街の中にある「コミュニティビル」と説明する方が正しいだろう。

一階は衣料品や雑貨を扱う。二階にも物販などが入り、三階は美容サロンとデザイン会社のスペース。そして、四階は「スカイ公園」と名付けられた無料の開放空間になっている。

ここでは市民が昼食や休憩に訪れ、交流の場にもなっている。もともと付近に公園が少ないと感じた杉田さんの企画によるものだが、今井書店の先代経営者も人が集まる場所を作りたいと思い続けていたことを知り、その願いを受け継ぐ形になった。



白地に「sky」の青い文字が映える、米子の新しい拠点

「コミュニティビルの役割を発展させるため、さまざまな行事を企画・実施していくことも杉田さんたちスタッフの仕事である。例えば若者だけでなく、幅広い年代の人が気軽に集まれる機会を提供したいと、親子連れが参加できるダンスやアート体験のイベントなども実現させた。今まで商店街へ来る人が少なかった人も訪れているようだ」

「スカイビルそのものが商店街のような存在になりたいですね。いろいろな場所へ移動しながら、新しい発見や体験がある。昔の商店街はそういう場所だったと思います」と杉田さんは語る。

商店街の存続が全国的な課題となっている一方、米国では郊外店にも空き店舗が生じ、欧州でも都心への商圏回帰が目立ってきた。ビジネスチャンスは大都市だけのものではなく、地方都市でも全国へ魅力を発信できるというのが杉田さんの持論だ。

例えば、インターネットの普及と発達で、山陰のモノや情報を外へどんどん紹介し販売することも可能になっている。行動せずにはチャンスは生かさない。そのことを杉田さんは身をもってメッセージしてくれているようだ。

米子を内と外から見続ける

大阪で生まれ、オーストラリアと米国へ渡り、米子を拠点に生活する杉田さん。その広い視野に米子市はどのように映っているのだろうか。「海や山が身近にあり、温泉にも自転車で通った私にとって、米子市はとても暮らしやすい環境。人もセカセカしていないし、何よりも誠実な人が多い。その一方で、どの地方都市にもいえると思いますが、ほどほどの収入、ほどほどの楽しみに満足しているような気が



毎日、さまざまな人たちがスカイビルを訪れている。

します。この現状を変えていきたいですね」と、杉田さんは次の目標を見据えている。

米子からの視点だけでは現状に甘えてしまいかもれない。杉田さんは大阪や海外の生活体験を通して、異なる発想や考え方の必要性も実感した。それが大きなビジネスチャンスにもつながってきた。

例えば、文化の違いからも、「ここをこつしたら山陰のモノが県外や海外でも売れるのでは」という行動が生まれるという。経済状況が決して良くないのは、米子市のような地方都市だけの問題ではない。それでもピンチをチャンスとしてとらえられるかを、杉田さんは失敗の体験からも学んできた。

以前は、一年のうち三分の二を米国、三分の一を米子で活動していた。そのスタイルも、年内に米子を四分の三へ転換したいと杉田さん。米国と米子は「米」つながりだ。そう思えば世界もいっそう身近になる。杉田さんはこれから内と外のまなざしを忘れない。

町に人がいる限り可能性は無量大

米子の商圏を守るだけでは現状を打破できない。商店街とつしに限られた需要を取り合いつつではなく、大きな

視点での活性化が求められる。そのきっかけになればとスタートしたスカイビルだが、杉田さんの行動はまだまだ止まらない。

「ファッションを扱う本業は外見の美しさや魅力づくりを提案するもの。これからは内面や気持ちも、どつ前向きに輝かせるかに関心があります。そこで講演会などの新しいイベントを企画できるよう、『スミル米子計画』という事業も展開しています。人気の講演者を招き、学生から大人まで千人近くの来場実績も達成しました。やればできる。みんなが求めていると手応えを感じ、年に二回の開催を目標に継続させたい」と杉田さんは期待する。

実行力や活力にあふれた若手経営者も増えたと実感する杉田さんは「町



無料の開放空間になっている「スカイ公園」

を創るのは人」という思いがここまで自分を動かしてきたと振り返る。だからこそ、全国から人が集まり、楽しめる場所を作りたいと願う。

今の子どもたちはスーパーやショッピングセンターしか知らないときえいわれている。杉田さんはそれがとても残念だという。

「私たちのような大人が頑張らなくていいれば、若い人たちが希望が持てると思っています。そういう会社や人が増えれば、地元に着して働きたいという若者も増えるでしょう。それが地域を動かす『チカラ』になり、米子が世界へ発信する魅力になると信じています」と、杉田さんは瞳を輝かせている。

町に人がいる限り、無量大の可能性は創られる。杉田さんをはじめ、米子を愛する人の可能性が、米子市の大きな可能性へつながっていく。元氣や希望という人間のエネルギーこそが、地域を発展させる活性源だろう。

平光 穰 ひらみつ・ゆたか

1960年広島県生まれ。広告・販売促進の企画制作業を営む傍ら、よつば編集広告事務所設立にも参加。自治体の広報や企業の情報媒体などに、中国地域を中心とした取材記事を幅広く執筆している。

ご当地 B 級グルメ 2

府中焼き

《広島県府中市》



ソバの上に盛られたミンチ

広島県東部の府中市はものづくりの町である。国が進める「ジャパンブランド」に認定された府中家具をはじめ、ラジコンヘリコプターや精密機器府中みそなどさまざまな分野で日本を代表する企業が集積している。そんな府中市で、地元ならではの「ご当地グルメ」として注目され、人気が高まっているのが「府中焼き」だ。「もともとはおやつ代わりに食べていたお好み焼きで、今でも仕事帰りや会社などで気軽に食べています。これだけ地域に密着した食べ物ですから、府中のまちおこしに生かせないかと、府中商工会議所から相談を受けたのが始まりです」。こつ語るのには「備後府中焼きを広める会」の会長を務める栗根克哉さんである。備後府中焼きを広める会は、二〇〇八（平成二十）年に市内のお好み焼き店三十四店の店主が集まって設立した会で、イベントなどを通じて全国へ府中焼きをPRしている。

府中市では古くから「府中焼き」が愛されてきた。作り方などは広島のお好み焼きとほぼ同じである。しかし、府中焼きの特徴は豚バラ肉ではなくミンチ（ひき肉）を使っていることだ。かつてはカマボコやチクワを入れていたが、昭和三〇年代に開業したお好み焼き店が安くてうまみのあるミンチを使ったのが始まりといわれている。ミンチを使うことで味が染み込みやすくなるし、外はカリッ、中はフワッとした感じで焼き上げることができるのだ。

広める会は府中商工会議所と連携し、府中焼きのお店マップの作成や府中焼きフェスタの開催などでPRに努めているが、自主的にマップを配ってくれるなど、市民の応援も活発だ。「府中の新しい誇りだと感じてもらっているようで、私たち会員の励みにもなっています」と、栗根会長。

府中商工会議所によると、市内には約四十軒のお店があり、人口一人当たりのお店の数は広島市にほぼ匹敵するという。それだけ市民の日常生活に密着した府中焼きは、まさにご当地ならではのグルメである。



藩ものがたり

5

鳥取藩

《鳥取市》

鎖国以前にはマカオやタイと交易していた亀井氏等に分割統治されていた鳥取。その後を一元支配した鳥取藩は、因幡・伯耆という地域特性が異なる二国に独自の地方知行制度を導入するなど、革新的な取り組みも行ってきた。



鳥取城跡から望む鳥取市の中心市街地

鳥取藩前史 亀井氏の鹿野施政

現在の鳥取県は因幡・伯耆の旧二国から成り立っているが、この二国は互いに隣り合っていて歴史的にも関係が深いものがあった。特に近世以降は鳥取池田氏によって一領域として支配された年数が長かったため、鳥取藩領を因・伯耆国と呼びならわすことが多かった。

しかし、池田氏が入国する以前、関ヶ原の戦い前後の鳥取は、中・小大名による分割支配が続いていた。関ヶ原の戦い後、それら大名の多くは改易・転封などの憂き目を見たが、因幡国でただ一人、領地を増強されて残ったのが東軍に従った鹿野城主・亀井茲矩である。

茲矩はもともと出雲の戦国大名・尼子氏の家臣で、主家の滅亡後は山中鹿之介に従い各地を転戦した。鹿之介の死後は羽柴秀吉の軍に従い、いち早く鹿野城を奪取し、そこを根拠として秀吉の鳥取城攻略に功を立てたので正式に鹿

野城主とされたのである。

茲矩はまた進取の気性を持つ大名でもあった。日光池の干拓や銀山経営など産業開発に努めたことはもちろん、十七世紀初頭には幕府から朱印状を与えられ、現在のマカオやタイ方面に貿易船を派遣するなど、大規模な海外貿易をもくろんでいた。

この構想は慶長十七（一六一二）年の茲矩の死と、後を継いだ政矩の津和野転封によって途絶したが、鹿野城は一時期とはいえ海外と交易を持ち、異国の物産にも恵まれ栄えていたのである。

亀井氏の施政は領民に多くの恩恵を与えたよつで、県指定無形民俗文化財の亀井踊りなどにしのぶ思いは残されている。

鳥取藩の成立 独特な地方知行制度

元和三（一六一七）年、姫路城主でわずか九歳の幼君であった池田光政が鳥取城に入城し、因幡・伯耆両国で三十三万石を領することとなった。これは豊臣氏の滅亡、家康の死去という二つの大きな時代の流れを受けた、二代將軍秀忠による大規模な大名入れ替えの一環としての措置であった。

ところが寛永九（一六三二）年、光政が壮年に至ると、今度はそのいところで岡山城主の池田光仲と領地替えの形となり、この光仲の流れが幕末まで鳥取藩主となる。そのため、一般に鳥取藩といえは、この系統を指し、初代藩主は光仲とされている。

当時光仲はわずか三歳であった。その身は江戸藩邸にあつたままであり、当然のことながら実務は家老たちによつて執行行われた。鳥取藩は二国にまたがり、地域によつてその特性がかなり異なっていた。そのため、生まれた独特の地方知行制度が「自分手政治」である。西の米子、中部の倉吉に家老の荒尾氏を置き、それぞれ町の支配を任せたのであ

幕末の鳥取藩と藩政改革

鳥取に藩校が置かれたのは宝暦六（一七五六）年で、翌年二月から開講、尚徳館と名づけられた。家中の侍以上の身分のものの嫡子・庶子に限り受講を許されたが、家老・用人以下の諸役人に対しては毎月一回の学館出仕日を設け、職場を離れて聴講することとされていた。

幕末に水戸家から慶徳（最後の將軍徳川慶喜の兄）を養子として藩主に迎えると、鳥取藩はがぜんとして革新の気風がみなぎるようになってくる。

慶徳が初めて領内に入ったのは嘉永五（一八五二）年のことであつたが、すぐさま教学の改革に着手し、学館の拡張・充実を図り藩士の子弟の強化に努めた。その後、尚徳館は尊皇攘夷派の志士を輩出し、幕末の鳥取藩に大きな影響力を持った。慶徳は、ペリー来航後は強硬な攘夷論を主張し、幕府に対して盛んに建言を行い、一橋派の諸侯とともに国事周旋に動いた。

しかし一方、慶徳が登用した改革派と藩の安泰を図る守旧派との対立も次第に激しさを増していった。藩内の改革派（尊攘派）の多くは長州藩と結んで幕府に攘夷を迫ろうとしたが、当時將軍後見役として幕府の中心であった弟慶喜との関係から、慶徳は苦境に立たされた。その中で、「二十士事件」（本園寺事件）といつて口行動も起こり、さらにその後、禁門の変後の長州征討への対応をめくり、藩は混乱した。

結局、慶徳が取つた立場は「尊王敬幕」という微妙なものであり、鳥取藩はその微妙な立場のまま明治維新を迎えることとなったのである。



鹿野城跡公園

監修：鳥取県教育委員会文化財課 写真：井上耕ノ介（鳥取市在住）

二万石を領することとなった。これは豊臣氏の滅亡、家康の死去という二つの大きな時代の流れを受けた、二代將軍秀忠による大規模な大名入れ替えの一環としての措置であった。ところが寛永九（一六三二）年、光政が壮年に至ると、今度はそのいところで岡山城主の池田光仲と領地替えの形となり、この光仲の流れが幕末まで鳥取藩主となる。そのため、一般に鳥取藩といえは、この系統を指し、初代藩主は光仲とされている。

鳥取藩は二国にまたがり、地域によつてその特性がかなり異なっていた。そのため、生まれた独特の地方知行制度が「自分手政治」である。西の米子、中部の倉吉に家老の荒尾氏を置き、それぞれ町の支配を任せたのであ



尚徳館跡の石碑

鳥取藩は二国にまたがり、地域によつてその特性がかなり異なっていた。そのため、生まれた独特の地方知行制度が「自分手政治」である。西の米子、中部の倉吉に家老の荒尾氏を置き、それぞれ町の支配を任せたのであ

正善院庭園

《鳥取県三朝町》

鳥取県のほぼ中央、三朝町にある標高約九〇〇メートルの三徳山。古くから神と仏の宿る霊山として知られ、修験道の行場として栄えてきた。嘉祥二（八四九）年、慈覚大師円仁により釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来が安置され、天台宗三徳山三佛寺と称したといふ。

三佛寺本堂への途中、山の中腹あたりの石段左側にあるのが正善院である。往時には多くの僧坊、堂舎が軒を連ねたといひ、当寺院境内の東側にその遺構が確認されている。

（トル）ほどを占める庭園は、池泉回遊蓬莱山水式で、江戸初期の作庭と推定され、歴代藩主池田侯が愛でた庭としても知られている。庫裏を挟んで西側の前庭と東側の池庭とに分かれており、それぞれが異なる趣を見せる。

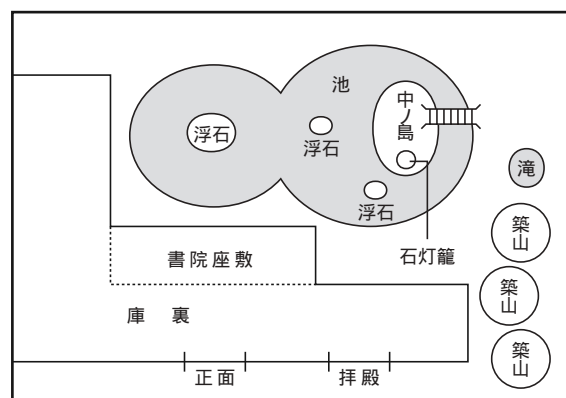
中ノ島には石灯籠や亀石が、池中には大小の浮石が配され、池に面した書院座敷からは池庭を前景として奥の院の文殊堂や地藏堂を望むことができる。三徳山の地形・眺望を十分に生かして設計された正善院。新緑に映えるシャクナゲ、秋の紅葉と借景の奥の院にかかる月、雪を被った灯籠など四季折々の美しさが、山陰道の名園の一つとして多くの参詣者を迎えている。二〇〇五（平成十七）年に県の名勝に指定された。

鎌倉期の建立と伝えられる正善院には、山岳仏教の霊地としての仏像、伝記、古絵図などが残っている。庫裏正面玄関右のギンモクセイと左のモリコクモ寺の古さを物語る。

前庭にある、起伏に富んだこけむした三つの築山は、阿弥陀、釈迦、大日の三徳を表しているといふ。もう一つの池庭には、後背の山林から取水された山水が滝となって落とされ、溪流のごとく池に注いでいる。



豊かな植物と静かな池庭が時間を忘れさせてくれる。右にあるのが中ノ島



配置図



書院座敷から見た池



紅葉が映える秋の庭園

お説びと訂正
前号「庭園逍遥」において、山口誓子を「津山市出身」と記したのは誤りでした。正しくは「京都府出身」です。お説び申しあげますとともに、訂正いたします。

瑠璃光寺五重塔

《山口市》



屋根の反りが美しさを引き立てる。

JR山口市駅から徒歩約五分の瑠璃光寺の境内に建つ。室町時代に大内盛見が兄の霊を弔うために建立したと伝えられる。京都の醍醐寺・奈良の法隆寺のものと並び、日本三名塔の一つに数えられている。

高さ三十一メートルで、屋根はヒノキの皮でふかれた「檜皮葺」である。一般的に、五重塔ではすべての層に回縁がついているが、瑠璃光寺五重塔は下から二層目だけについており、大きな特徴となっている。また、建築様式は和様であるが、回縁の逆蓮頭のように一部に唐様が入り入れられている。夜間にはライトアップされ、美しく浮かび上がる。



建築様式には唐様も取り入れられている。

たけしげみつりの
写真：竹重満恵（山口県岩国市在住）